

(注) 解答はすべて解答用紙の指定された場所に記入しなさい。

— 次の文章を読んで設問に答えなさい。

教育学あるいは教育心理学分野での議論になるが、「2つの学習観」という形で論じられるテーマがある。「ピアジェとヴィゴツキー」の話と言い換えることもできる(池田寛『学校再生の可能性』大阪大学出版会、2001年)。私なりの言葉で、その議論を簡単に振り返っておきたい。シンプルに言うなら、「伝統的な」学習観はピアジェから、「新しい」学習観はヴィゴツキーから来ており、個人中心の前者から社会関係重視の後者への切り替えが今日求められているという話である。

ピアジェ(スイス生まれ、1896～1980)とは、20世紀で最も有名な発達心理学者の一人である。彼は思考の発達を、「感覚運動期」(0～2歳)、「前操作期」(2～7歳)、「具体的操作期」(7～12歳)、「形式的操作期」(12歳以降)の4段階でハアクしたことでよく知られている。自分中心の見方・考え方を幼児期から、具体的なものを媒介として考える児童期を経て、抽象的な思考を展開する青年・成人期にいたるとするピアジェの図式の影響力は圧倒的で、今日の学校教育の基本的な捉え方になっていると言っても過言ではない。学校の先生方が、「子どもたちの発達段階に応じて学習を組織していかねばならない」と言う時、ほぼ例外なく想定されているのがこのピアジェの発達段階である。

簡単に言うなら、ピアジェにとつての学習は、「個人の頭のなかで起こる」ことである。具体的思考から抽象的思考へ。冷静に論理的に物事を考えることができる個人が、ピアジェにとつての理想的な学習者である。その枠組みのなかでは、子どもたちは、「1」として振る舞うことを期待されていると言つてよい。「年齢のわりにしっかりと知っているね」という言い

方がほめ言葉になるのは、そうした脈絡^(ウ)においてである。

それに対して、ロシアの心理学者ヴィゴツキー(1896～1934)は、ピアジェとは対照的に死後注目された人物で、思考や学習における他者との関係性に注目した。最もよく知られた概念が、「発達の最近接領域」というものである。これは、「一人ではできない(わからない)」が、「他者(＝教師や仲間)のサポートがあればできる(＝わかる)」という行為の水準ないしは領域のことである。ヴィゴツキーは、教育の極意を、一人ひとりの子どもの発達の最近接領域に適切に働きかけることにあると捉えた。

古い言葉に「啐啄同期^(ソツタク)」という四字熟語がある。これは、鳥のひなが卵の内側をくちばしでつついて出ようとする時、親鳥がその場所を外側から同時につついて卵の殻を割ろうとすることを言うそうである。内と外の動きがうまくかみ合った時、ひなは卵の世界から抜け出ることができ、ヴィゴツキーの概念は、そのキビ⁽²⁾にふれるものと位置づけることができよう。皆さんにも、心当たりがあるであろう。

2

少し説明が長くなったが、要するに、誤解を恐れずに言えば、ピアジェの学習観が「すぐれた個人がすぐれた学習者になる」というものであるのに対して、ヴィゴツキーの学習観は「身近な他者の的確なサポート・援助こそが、学習の成功の鍵になる」というものである。もちろん、両面ある。しかし私は、圧倒的に後者の学習観の方が好きである。経験上、そちらの方がストーンと胸に落ちる。「つながり格差」という発想は、そうした背景のもとに生まれたアイデアである。

学力というと、まず個人の能力や資質に焦点があてられる傾向にある。「できる子・できない子」という見方である。私はそうした見方に反旗を翻^(エ)したい。「できる・できない」は⁽³⁾シヨヨではなく、環境との相互作用によって結果的にもたらされるものである。いわば、「できる子」「できない子」は社会的につくり出されるのである。

さらに言うなら、種々の学力テストの結果が公表された時、平均点の高い学校が「よい学校」、低い学校が「悪い学校」と見られることが一般的である。私は、それにもギギを呈したい。⁽⁴⁾平均点の高さは、その学校の「教育・授業の質の高さ」だけを意味するものでは決していない。それは、生徒たちの出身地域・家庭の「教育力の高さ」を含み込んだものであり、教師が特段何もしなくても、あるいはさぼっていても、平均点が高い学校はいくらでもありうるのである。ある学校の子どもの学力テストの成績は、「学校の力」と「地域・家庭の力」の総和としてもたらされる。地域や家庭に多くの課題が見られる時、学校・教師がどれだけがんばっても、なかなか成果に結びつかないことがままある。「つながり格差」が指摘しようとしているのは、そうした今日の学校がおかれたクキョウ⁽⁵⁾であり、そうした現状を打開するための展望である。

(志水宏吉「つながり格差」が学力格差を生む」より)

問一 傍線部(ア)～(オ)の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

問二 傍線部(1)～(5)のカタカナを漢字に直しなさい。

問三 傍線部 a で、「ピアジェとヴィゴツキー」とあるが、次の選択肢ア～コについて、ピアジェの学習観を説明しているものはA欄に、ヴィゴツキーの学習観を説明しているものはB欄に、どちらの学習観にも合致しないものはC欄に分けて、それぞれ記号で答えなさい。

- ア. 「身の回りのことを一人ではできない」子どもの発達に着目した学習観
- イ. 子どもが優れた大人になることをめざす学習観
- ウ. 学習の成功の鍵を個人の内面に見出す学習観
- エ. 個人が年齢とともに発達するという学習観
- オ. 学習は子どもと他者との関係性の内に展開されるとする学習観
- カ. 日本の学校教育の方針になると筆者が考える学習観
- キ. 他者との関係を重視する学習観
- ク. 子どもの発達段階という考え方をあえて否定する学習観
- ケ. 子どもの発達には他者からの支援が求められるとする学習観
- コ. ロシアの教育で主流となった学習観

問四

1 に入るもつとも適切な語句を次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 純真な子ども
- イ. 頑固な子ども
- ウ. 従順な人間
- エ. 幼稚な大人
- オ. 小さな大人

問五 2 には、ヴィゴツキーの学習観を具体的な場面だとえた文章が入る。次のア～オから適切なものをすべて選び、記号で答えなさい。

- ア. 父親に自転車を押しってもらうことによって自転車に乗れるようになった。
- イ. 親がすすめることを勉強させられているうちに学ぶ意欲を失った。
- ウ. 兄の趣味を見て自分も同じ趣味をもつようになった。
- エ. 家の手伝いを強制的にやらされているうちに辛抱強さが身に付いた。
- オ. 先生にお尻を支えてもらうことで逆上りのコツがわかった。

問六 筆者がとらえている学力観を「個人」と「環境」という語句を必ず用いて、六〇字以上八〇字以内でまとめて書きなさい。

二 次の文章を読んで設問に答えなさい。

「準拠集団」(reference group)という概念は、^(ア)「所属集団」(membership group)との対比において作り出された、社会学の重要な用語のひとつである。私は、「世間体」を社会心理学的に考察するにさいして、この「準拠集団」という概念を広義に解釈し、うまく適用することが、もつとも生産的であると考えている。「世間」についてもしかりであり、のちにべのように、「体面・体裁」^(イ)というばあいの「はじ」についてもまた、しかりである。

私たちはふつう、家族、親族、地域社会、学校、職場、団体、等々といったように、さまざまなレベルの集団に⁽¹⁾ジューソウ的に所属している。一般に、自分がじっさいにぞくしている集団のことを、「所属集団」という。ところが、たとえ客観的にはまったく同一の集団に属していても、メンバーのひとりひとりが〈自分の集団〉であると感ずる^(ウ)度合は、かならずしも一様ではない。それはメンバー各自が自分の態度や行動のよりどころとする規準に、いろいろちがいがあからだ。私たちが自分の態度や行動のよりどころとするような集団のことを、「準拠集団」というのである。

「準拠集団」は、自分が心理的に関係づけている集団のことだから、まったく主観的なものである。したがって、客観的に規定される「所属集団」とは、いつもびったり重なりあっているとはかぎらない。いや、むしろじっさいには、重なりあっていないことが多いものである。理想と現実の関係をひきあいに出すまでもないであろう。

ここでいう「集団」について、一言しておきたい。「集団」の意味を、このさい、私は^aきわめて広義に解したいと思う。たとえば、⁽²⁾ゲンミツにいえば、階級や階層は「集団」ではない。しかし、客観的な規定とはべつに、だれしもが、なんらかの主観的な〈帰属意識〉をもっている。じじつ今日では、階級や階層の問題に「準拠集団」の考え方を適用することによって、この分野での研究は、⁽³⁾ヒヤク的な発展をみているのである。

「世間」は、個人(行為主体)のがわからみれば、わが国の人びとに特有な、一種の「準拠集団」である、と私は考える。

「世間」もまた、⁽²⁾「ゲンミツ」にえば「集団」ではない。だが、「準拠集団」の考え方を適用することによって、「世間」の構造の特質が、たぶん、くつきりと浮きぼりにされることであろう。

人はいつたい、どこから「世間」とよび、どこまでを「世間」とよぶのであろうか。そのテリトリーを規定するものは、客観的に存在するところの規準ではけっしてない。それはきまって、私たち個々人の主観のがあるからだ。「世間」はいきおい、^(エ)漠然とした、あいまいなものとならざるをえないであろう。きびしくいえば、個人の数だけ「世間」があるということにすら、なりかねない。にもかかわらず、準拠集団としての、「世間」に着目するとき、そこにはおのずから、「世間」は一定の構造をもっていることが知られるのである。

準拠集団としての、「世間」を区別する規準は、「ウチ」と「ソト」の観念である。私たちは、ふつう、生活空間をウチとソトにわけてとらえている。自分がぞくしている範囲がウチであり、それ以外がソトである。このウチとソトとの関係は、けっしてステイチック（静的）な関係ではない。それは、すぐれてダイナミック（動的）な関係なのである。なぜなら、ウチとソトの規準は、人の置かれている状況によって異なるからである。このことは、集団についてもまったく同様に、あてはまるにちがいない。

ウチとソトの区分は、なにも、わが国特有の発明ではない。このウチの集団とソトの集団の区別には、社会心理学では、従来から、「内集団」(inner-group)と「外集団」(outer-group)という区分概念がもちいられてきた。ウイリアム・G・サムナー^{*}によってつくり出されたこの概念は、その後、ゴードン・W・オルポートの⁽⁴⁾ヘンケンの研究のなかで実をむすんだ、といわれる。

(井上忠司「世間体」の構造より)

*ウイリアム・G・サムナー…一八四〇年生まれ。政治学、社会学、人類学など広範な分野で活躍。

*ゴードン・W・オルポート…一八九七年生まれ。アメリカの心理学者。

問一 傍線部(ア)～(エ)の漢字の読みを書きなさい。

問二 傍線部(1)～(4)のカタカナを漢字に直しなさい。

問三 傍線部 a で「きわめて広義に解したい」と述べているが、筆者がとらえている広義な集団とはどのようなものか。四〇字以内で書きなさい。

問四 筆者は所属集団をどのように説明しているか。本文中の言葉を使い五〇字以内で書きなさい。

問五 次のア～オの集団のうち、「準拠集団」にあたるものをすべて選び、記号で選びなさい。

ア. 伝統文化を尊重する人びとの集団

イ. 中学校の同窓会

ウ. 愛犬家の集団

エ. 上田市内で働く人の集団

オ. 疾病患者の家族会

問六 傍線部 b で「世間は一定の構造を持っている」と述べているが、次のア～オの中から筆者の主張の主旨に合うものすべてを選び、記号で答えなさい。

- ア. 「世間」は客観的な構造を持っている
- イ. 個人の数だけ「世間」の構造があるわけではない
- ウ. 「世間」のウチとソトの区別は、きわめて主観的なものである
- エ. 所属集団としての「世間」には、構造は存在しない
- オ. 個人にとって「世間」のウチとソトの関係性はさまざまであるが、成人になればほぼ一定になる

問七 筆者は準拠集団としての「世間」をどのように説明しているか。八〇字以内で書きなさい。

(問題終わり)